



平成29年5月29日(月)

藤 棚

第338号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

北朝鮮の危険な動きについて

校長 小川義男

核兵器が発達して、人類の存続が脅かされている。核兵器は、コストとしては最も安上がりな武器で、その作製方法も簡単になってきている。携帯型の核兵器が作られるのも、そう遠いことでもあるまい。人類は結局、科学の間違った使い方滅亡するのではないか、そんな心配も、心をかすめる。

北朝鮮の今の支配者の父、金正日と言ったが、彼は現実的思考ができる人間であった。王制国家は世襲であるが、北朝鮮は、この正日に続き、現在の権力者も、その地位を世襲で獲得した。1945年以降としては、若しかすると、世界唯一の新しい世襲国家であるかも知れない。

金正日は、ルーマニアのチャウシェスク政権の劇的崩壊、チャウシェスク大統領夫妻の、裁判とは名ばかりの虐殺の模様を、ニュースその他で見ていた筈だ。

ルーマニアは、「夢の都ブカレスト」などと宣伝されていたが、真相は、人権などかけらも存在しない独裁国家であった。体制が崩壊した後、大統領夫妻は裁判にかけられたが、どうもそれは、大統領夫妻と共に横暴の限りを尽くした幹部集団の「責任転嫁裁判」であつたらしい。裁判もそこそこに、死刑が宣告され、三審制どころか、判決の直後に、虐殺的な状況で死刑が執行され、その惨めな写真が、全国に報道されたのである。

「弱気になった独裁者」が、いかなる運命を辿るか、金正日は、その状況から多くの教訓をつかみ取ったのに違いない。

そして今の金正恩氏は、「先軍制」の名の下に、徹底した独裁体制を実施している。何しろ、意見が合わなかったからなのかどうかは定かでないが、その肉親の叔父を処刑した。それも、高射砲で粉砕したというのだから、全国民が震え上がったことであろう。

北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)は、面積12万平方キロ 人口2258万の小国である。そんな小国で、軍隊を優先する体制を取れば、民衆の生活が苦しくなるのは避けられない。

私は、六年前、朝鮮の北緯38度線、つまり南北の国境線を訪ねた事がある。板門店という休戦会談が行われた場所がある。建物の中に38度線の国境があり、南北それぞれの兵士が、建物内の国境を守っていた。北朝鮮の兵士も、まことに好感の持てる人物で、私は、その隣で写真も

一緒に撮った。

道をそれたら地雷原だと脅されてはいたが、まことに、のどかな、平和な光景であった。

但し、38度線の北側は、ほとんどすべて禿げ山であった。南は青々としている。薪として、すべて燃料に使ってしまったのかも知れない。当然、洪水も起ころう。あの寒い地域で、二千万の国民を養うのは大変であろうと思う。おまけに、小国に不相応な軍隊を維持するのだから、それは本当に大変に違いない。

もともと、北朝鮮では、兵士は、農繁期には食糧生産に携わるというのだから、それなりに、生活を維持するために努力しているのではあろう。

金正恩氏は、核兵器でアメリカや韓国、日本を壊滅させようとしているのではない。それはできない相談だし、それでは北朝鮮自身が、壊滅的崩壊を辿ることになる。

彼が恐れているのは、北朝鮮の、体制そのものの崩壊である。きっと彼は、父金正日から、ルーマニヤの、劇的体制崩壊の話をも十分に聞かされているのに違いない。

彼がしきりに「話し合いたい」との姿勢を見せるのは、自分が支配する国家体制に関して、それを崩壊させることはないという、彼なりの「安全保障」を求めているからなのである。私はそう思う。

トランプアメリカ大統領は、日本海に空母を遊弋させるなどの政策をとりつつあるが、これは、「鼻に目薬を入れる」ようなものだと私は思う。北朝鮮が、将来いかなる国家体制を取るかは、そこに生きる国民全体の問題、国民自身の問題であり、近隣大国、世界の大国は、それに対して、いささかも内政に干渉するものではない、この事を明らかにすることが、今一番大切なのである。

日本海に大艦隊を派遣することは、ロシアや中華人民共和国(中共)にも危機感を与える。世界平和維持の観点からも、好ましくはない。

もともと、最近の中国には、19世紀の植民地獲得競争にも似た、大国主義的傾向が著しくなりつつある。最近の「一帯一路」にも、このような大国主義的膨張主義が感じられる。

中国は社会主義国ではない。国内に、農村戸籍と都市戸籍の二種類が存在し、貧富格差も著しく増大しつつある。しかし、この国は社会主義国ではない。必ず新しい建設的方向を辿るであろう。しかし、当面この国の、膨張主義的傾向、軍事予算の急速拡大は、留まる気配がないから、我が国は聡明に、この強大隣国と、付き合っていく必要がある。

ロシアも、今や完全に市場経済、つまり資本主義経済による国家であるから、我が国が協調できないわけではない。但し、地政学的に、北の寒い地域の国家は南進したいという、いわゆる「南下」への内的衝動を持っている。これは、必要最小限の自衛力を持ち、日ロ友好を深める中で、乗り越えて行かなければならない壁であろう。

私は、学生時代に、金日成総合大学に来ないかと誘われたことがある。いい加減なものではなく、相当しっかりしたルートからの誘いであった。若い私は、行きたかった。しかし、当時の私の政治的立場もあり、それは実現しなかった。そんな経過もあり、私は、北朝鮮に強い反感を抱いている人間ではない。朝鮮全体が日本であったこともある。朝鮮人が、数々の点で優れた民族であることも私は知っている。

今の北朝鮮を、どうにもならない悪質分子と見るのではなく、金正恩氏が、ひたすら、体制の崩壊を恐れているのだとすれば、北朝鮮とは、今とは別な付き合い方もあるのではないかと私は思うのである。